

音順	方劑名 傷寒論・金匱要略条文	生薬構成 および製法・服用方法
まー10	<p>麻杏薤甘湯 (麻黄杏仁薤苈甘草湯)</p>	<p>読み および解説・その他</p> <p>麻黄 (苦温) 節を去り、ふり出してアクを抜く 0.5g ・ 甘草 (甘平) 炙る 1g ・ 薤苈仁 (甘微寒) 0.5g 杏仁 (甘温) 炒って皮尖を去る 0.5g</p> <p>上の諸薬を麻の実の大きさに刻んで、1回の服用毎に4gを取り、60mlの水を以って煮て、32mlとし、滓を去り温服する。</p> <p>麻黄湯 - 桂枝 + 薤苈仁に相当する。 少し汗が出て治るのであるが、その場合風に当たらない様に注意する。</p>
<p>瘧湿喝病脈証併治第二第21条 (金匱要略)</p>		
<p>「病者一身ことごとく疼みて発熱し、^{にっぽしよ}日晡所、劇しき者は風湿と名づく。此の病は汗出でて風に当たりて^や傷られ、或は久しく冷を取りて傷られ致す所なり。麻黄杏仁薤苈甘草湯 (麻杏薤甘湯) を与うべし。」</p>		
<p>解説 病人の身体中が痛んで、熱が出て、日晡所 (陰陽が移り変わる午後3時から5時頃の間) になると、特に症状と、発熱が激しいものは、風湿と名づける。この風湿を起こす原因は、汗をかいて表が開いている状態に、身体が熱いので、風に当たって表を冷やしたために、皮膚の陽気、陰水を奪われ過ぎて、皮膚が冷え、水気を散ることが出来ずに、内に滞って湿を起こす。或いは久しく冷を取りて、皮膚が冷え、表の陽気の交換がうまく行かなくなってしまう、湿が生じる。以上の様な原因により、皮膚の正常な機能が狂ってしまい、特に、手足に痛みを感じずる者に、麻杏薤甘湯が主治するのである。</p>		
<p>麻杏薤甘湯は、対象は実証で、麻黄加朮湯と同様に、やや小便不利であるが、食欲に異常はない、即ち裏に異常は無く、表の筋肉に熱がある時に用いる。また日晡所 (午後3時から5時頃の間) の関節リウマチ、単なる筋肉痛にも使える。</p>		
<p>麻杏薤甘湯は、麻黄湯より桂枝を除いて、陽明の経病である筋肉の風湿を発しているものを、薤苈仁で筋肉の熱と、湿を取る。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>夕方 (日晡所) は、体表にあった陽熱が、体内の方にめぐり出し、それに代わって体内をめぐっていた陰水が、表の方に出て来る。明け方は、その正反対の現象が現われるが、普通、健康体の人の場合は、本人が気が付かずに、この気血の循環は天地自然の運行にさわりなく行われている。しかし、一度、体の内外に病的な変化が生じてスムーズにいかないと、夕方 (日晡所) に疼みを生じたり、かゆみを生じたり、皮膚病を起こしたりする。</p>		
<p>麻杏薤甘湯の場合は、湿気が、体内に変化を及ぼして、疼みを起こすのである。</p>		
<p>参考 風湿は、発熱を伴い、寒湿は、まだ発熱に及んでいない。</p>		
<p>朝が動かしにくく、日晡所 (午後3時から5時頃の間) に楽になる関節炎、関節リウマチの場合は、原因は、湿では無く、労働などによる血虚によるもので、この場合には、黄耆建中湯や、炙甘草湯を用いる。</p>		
<p>麻杏薤甘湯 (麻黄杏仁薤苈甘草湯) 証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「永く冷える処に居たり、冷える仕事をしたり、又は薄着して汗をうんとかく程の仕事を永くしたりした爲に、身体中が疼痛し、特に午後の3時か4時頃になると疼痛も一段と強くなって、熱も出て来ると言ふ者、冷えから起こると言ふのが本方の行く処の根本たり。」と記されている。</p>		